

## 2026-01-16 すばる科学諮問委員会 議事録

---

日 時 : 2026年1月16日 9時30分~13時45分 (JST)  
場 所 : 各自 zoom 接続  
出席者 : 諸隈智貴、久保真理子、伊王野大介、井上昭雄、大朝由美子、大栗真宗、  
河北秀世、川端弘治、小宮山裕、佐藤文衛、下西隆、但木謙一、冨永望、  
松岡良樹、和田武彦、武藤恭之  
欠席者 : なし  
陪席者 : 宮崎聡、神戸栄治、早野裕、小山佑世

---

議題 :

1. Report from Subaru Telescope (宮崎)	2
2. 前回議事録の承認 (諸隈)	3
3. PI-type Instruments: SCEXAO (諸隈)	5
4. TAC report (武藤)	10
5. PFS Community Filler (諸隈)	19
6. ToO Trigger Duplication (諸隈)	20
7. Subaru UM 2026 (諸隈)	27
8. メキシコ (IA-UNAM) との連携について (小山)	28

---

=== 今回の A/I 及び議論サマリ ===

### 【報告事項】

宮崎所長から観測所運用について以下の報告があった。

- ・ 直近の望遠鏡運用は概ね安定しており、望遠鏡および観測装置に大きなトラブルは報告されなかった。
- ・ 天候不良、キラウエア火山噴火などにより、相当数の観測夜が失われた。また、第3鏡再蒸着による観測停止夜もあった。
- ・ 2025年12月23日のキラウエア火山噴火では、特に近赤外において背景光が極端に増大し、当該夜の相当部分の観測時間が失われた。
- ・ S26A では PFS は3回(3月、5月、7月)の観測ランが予定されており、それぞれにエンジニアリング夜が割り当てられている。

- ・ 可視第 3 鏡の再蒸着は無事完了し、赤外第 3 鏡の再蒸着を 2026 年 4 月に予定している。今回は観測所単独で実施する予定である。
- ・ 2027 年夏頃を目途とした主鏡再蒸着の検討を開始した。
- ・ SCExAO と並行して実施された SPIDERS の試験観測は、天候による損失はあったものの概ね成功と報告され、5 月下旬から 6 月上旬にかけて第 2 回試験観測が予定されている。装置の概要および将来的な科学利用について日本コミュニティと共有するため、次回の Subaru Users Meeting に SPIDERS チームを招待する予定である。

#### 【議論】

- ・ AI を用いた議事録作成について、構成 (Summary/Decisions/Action Items/Discussion) の妥当性、特に Decision と Action Items の扱いを中心に意見交換した。Discussions で発言の抜け落ちが生じる課題への改善策を議論した。
- ・ SCExAO を Facility Instrument とすべきか否かについて、これまでの議論を踏まえた今後の進め方が提示され、コミュニティ意見収集 (アンケート) の具体案を幅広く議論した。
- ・ PFS Community Filler 再考では、「既存枠の全面置換」ではなく「既存枠の一部維持+ノーマル提案枠の新設」とする理解が有力であることを共有し、詳細検討は WG に委ねた。
- ・ TAC 関連では、S26A 採択結果、DPR アンケート報告書案、SJ 規定のマイナー改訂と SJ テンプレート導入方針、代替 TAC 委員の扱い、TAC 会議日程を共有した。
- ・ 現状、ルールの存在しない ToO トリガーの重複に対する取り扱いを議論し、調整体制 (ToO コーディネーター) とポリシー可視化、夜数配分を含む方針を整理し、UM で議論する方向で一致した。
- ・ 2026 年すばるユーザーズミーティングは 7 月上旬 (JST) を軸に日程を検討し、大型研究会等との重複を回避した上で、次回 SAC で日程と世話人を確定する。
- ・ メキシコ (IA-UNAM) との連携は、先方法務コメント待ちにより S26B 開始は困難であるため、開始時期を S27A へ変更した。

## 1. Report from Subaru Telescope (宮崎)

- Operation
- Telescope
- Development

---

## 2. 前回議事録の承認（諸隈）

### 2.1. Summary

- 2025年12月開催分のSAC議事録案について、その確認方法や運用上の課題について説明があった。
- AIを用いた議事録作成における構成（Summary／Decisions／Action Items／Discussion）の妥当性、特にDecisionsおよびAction Itemsの扱いについて意見交換が行われた。
- Discussion部分で発言の抜け落ちが生じている点が課題として共有され、改善策が検討された。

---

### 2.2. Decisions

特になし

---

### 2.3. Action Items

- 諸隈：前回12月分のニュースレターのドラフトを会議後速やかに作成し、委員に共有する。
- 諸隈：Action Itemsを一覧化し、後日SAC委員間で共有する。
- 諸隈、小山、上清：文字起こし直後の段階で内容確認を行う新しい運用を試行する。

---

### 2.4. Details

諸隈：最初に前回12月分の議事録案について説明する。先週、委員の皆さんに送付したが、年末年始の事情で遅くなってしまい申し訳ない。確認への協力を感謝する。

議事録確認の運用について課題を感じており、現在はTeams上で確認を依頼しているが、委員ごとに確認のタイミングが異なるため、特定の委員に名指しで確認依頼を出したい場合の方法が分からない。システム上可能なのか把握できておらず、もし解決策がなければ改善を考える必要があると感じている。後ほど上清さんに相談する予定である。

また、ニュースレター配信の運用についても悩んでいる。現在はAIで作成した議事録案の冒頭にあるSummaryをニュースレターとして流用する形で、議事録案とニュースレターを1つのファイルにまとめている。作業効率の面では利点があるが、非公開版・公開版で残す内容が異なるため、修正が複雑になり、分かりづらくなっている。

今回はSummaryを一度整理し直した上でニュースレターとしてまとめ、委員に数日確認してもらった後、迅速に配信したい。会議終了後にニュースレター案を送り、概ね問題なければ日本時間の月曜日にGOPIRAのメーリングリストへ流す予定である。次回以降の運用

については、上清さんも含めて相談したい。

さらに、AI 議事録の構成について説明する。Summary、Decisions、Action Items、Discussion という構成を基本としているが、Discussion とされている部分が、実際には諸隈のみが説明しており、議論ではなく報告に近い場合がある。公開版議事録を確認した吉田副台長から、そのような場合に Discussion という名称は適切ではないのではないかという指摘を受けた。逐一項目名を変えるのは手間が大きいので、Discussion ではなく Details など別の名称で統一することを検討している。

また Decisions や Action Items については、AI が無理に抽出している例があり、修正が多く入っている。Action Items については、何をやるべきだったかが分かるため内部的には残したいが、公開する必要はないと考えている。Decisions については Summary や Discussion と内容が重複することが多く、項目として設ける必要があるのか疑問を感じている。すぐに決める必要はないが、そろそろ方向性を決めたいと考えており、意見があれば伺いたい。

松岡：Decisions の項目を見ると、議論の中で方向性が示された程度の内容が Decisions として書かれていることがあり、実際には決定したわけではないのに、決議したような印象を与えてしまう。従来のように議論の流れをそのまま残し、Summary と Action Items はあっても Decisions は設けない方がよいのではないかと感じている。AI が議論の強度を正確に判断できるようになれば別だが、現状では難しいと感じている。

諸隈：自分も同じ感触を持っている。重要な点は Summary に書かれ、決定に至っていない内容は表現の仕方で強度を調整できる。Decisions を独立した項目として設けなくてもよいのではないかと感じている。

松岡：Discussion 部分で、本来あったはずの議論や自分の発言が抜けている箇所があり、それが意図的な省略なのか単なる欠落なのか分からない点が気になった。

諸隈：重要な議論が抜け落ちていた事例があったことは把握している。現在は、上清さんによる文字起こし後、小山さんと諸隈で全体を確認し、大きな抜けがないかをチェックした上で修正し、委員に共有しているが、見落としがあった。今回は、松岡さんからの指摘を受け、確認したところ実際に重要な議論が抜けており、上清さんに後から追記してもらった。改善策として、会議終了後すぐに作成される文字起こしを小山さんと諸隈で確認する運用を試したいと考えている。文字起こし自体に問題があるのか、そこから議事録案を作る過程に問題があるのかはまだ切り分けられていないが、改善につながると考えている。

諸隈：書記の負担は減った一方で、上清さんの負担が大きく増えている。最終的には AI により人の負担が減る状態を目指しており、そこに至るまでの過渡期として試行錯誤している状況である。

井上：SAC では多くの議論が行われるが、何が決定事項で、何が継続審議なのかが分かりにくい印象を持っている。報告、決定、継続審議、意見聴取といった区分を意識して議論し、決定事項についてはその場で明確にすれば、AI も判断しやすくなるのではないかと。

諸隈：その指摘はもっともであり、議事録のためというより、議論が今どの段階にあるの

かを委員間で共有することが重要だと認識している。今後は意識して進行したい。また、AI が抽出した Action Items を一覧化して管理し、委員間で共有する取り組みを進めようとしている。今回の議事録案については、会議後に全体を一度確認してもらい、特にコメントが付いている箇所について修正を反映した上で最終版としたい。メール審議とする可能性もあるため、会議終了後に一度目を通してもらえると助かる。

---

### 3. PI-type Instruments: SCEXAO (諸隈)

#### 3-1. Summary

- SCEXAO を Facility Instrument とすべきか否かについて、これまでの議論を踏まえた今後の進め方が提案された。
  - コミュニティの意見を把握するため、SAC 委員・TAC 委員、あるいはより広い対象へのアンケート実施案が示された。
  - アンケート対象、設問内容、事前説明の必要性、観測所リソースとの関係について幅広い意見交換が行われた。
- 

#### 3-2. Decisions

特になし

---

#### 3-3. [Action Items]

- 観測所・SAC：アンケートの内容・対象範囲や事前説明資料準備について検討する。
- 

#### 3-4. Details

諸隈：PI 装置に関する議論は、直近の UM での PI 装置ワークショップも含め、これまで複数回行われてきた。特に、SCEXAO を Facility Instrument とすべきか、あるいは現状のままでもよいのかという点について、個別にも議論されてきた経緯がある。SAC で議論するよう求められてきたものの、どのように進めるべきか悩んでいる。小山さんや観測所の方々に相談した結果、今回、以下のような進め方を提案したいと考えた。

まず、コミュニティの代表である SAC 委員、場合によっては TAC 委員も対象にアンケートを実施したい。口頭での議論ではなく、アンケート形式とする。内容は検討中だが、研究分野、SCEXAO の利用経験の有無、Facility Instrument 化への賛否、その他意見等を想定している。そのアンケート結果をコミュニティの意見として SAC で整理し、今後の対応を検討することを考えている。

そもそも Facility Instrument 化の議論が生じた背景には複数の論点がある。SCEXAO は長期間

PI 装置としてすばるに設置されており、過去に SAC 委員から「なぜ Facility Instrument 化しないのか」という問題提起があった。UM 等でも議論されてきたが、PI 装置であるため、プロポーザル提出時に PI グループへの事前コンタクトが必要であり、装置チーム外の研究者にとって使いづらいのではないかと、提案しづらいのではないかとといった指摘が感覚的に語られてきた。一方で、その実態は十分に把握できていない。自分自身も当該分野の専門外であり、判断が難しい。

また、宮崎さんが繰り返し指摘している点として、PI 装置である以上、PI グループが撤退した場合に装置チーム外のユーザーがどの程度困るのかも明確ではない。さらに、Facility Instrument 化した場合、観測所側に一定のリソース投入が必要となるが、それが可能かどうかという問題もある。こうした点について、観測所側の視点ではなく、ユーザーやコミュニティの視点から、現状の「そう感じられている」という点を明確にしたい。そのため手段としてアンケートを考えている。本日はアンケート内容そのものではなく、この進め方自体について意見をいただきたい。

大栗：アンケートを実施する理由が現時点では十分に理解できていない。これまでの SAC での議論では、SCEXAO で重要となる研究分野に近い委員から Facility Instrument 化した方がよいという意見が出ており、それに明確に反対する意見もなかった。そのため、SAC としては基本的に Facility Instrument 化に賛成しているという認識を持っていた。一方で、Facility Instrument 化のメリット・デメリットを整理しない限り、十分な議論はできないと考える。アンケートを取る意図をもう少し明確にしてほしい。

諸隈：アンケートを実施したい理由の一つは、過去の議論にすべての委員が参加していたわけではない点である。もう一つは、Facility Instrument 化に賛成という意見が、SCEXAO を実際に利用している人や、関連分野の研究者全体で共有されているのかが分からないという点である。限られた人数の意見ではなく、より網羅的に実態を把握したい。

松岡：自分も大栗さんに近い意見である。以前、SAC として Facility Instrument 化を進める方向になり、観測所側でもその方針で検討するという話になった記憶がある。今回の提案は、その時点から一度後退したような印象を受ける。

諸隈：その感覚は自分も持っている。正確ではないかもしれないが、SAC では Facility Instrument 化すべきだという総意になったのは事実だと思う。一方で、その後の PI 装置ワークショップや UM で、メリット・デメリットが十分整理されていない中で、SAC として進めてよいのか迷いが生じた。どの順序で何を進めるべきか分からなくなっている、というのが正直な状況である。

松岡：観測所としては、この議論を現時点でどの段階にあると認識しているのか。一度、SAC から観測所に調査を依頼した記憶もある。

川端：SCEXAO の議論に関連して、アストロバイオロジーセンター（ABC）には SCEXAO に関わっている研究者が一定数いる。観測所とは異なる立場でもある。SAC がどこまで関与するかは別として、状況把握のために一度意見交換の場を設けてもよいのではないかと考

える。例えば、村上さんや水木さんなど、SCEExAO チームの中核ではないが分野的に近い研究者がいる。そうした人々と意見交換をせずに SAC だけで議論を進めるより、協力関係として進めた方がよいと感じている。

また、Roman のコロナグラフを用いた Habitable Worlds Observatory (HWO) に向けたコロナグラフ実証の話があり、SCEExAO で実証された技術が Roman、さらに HWO につながる流れが見えている。日本では ABC の研究者が Roman CBP を主導しており、そうした文脈も含め、SCEExAO の進め方や Facility Instrument 化、日本としての関わり方について意見交換しておくことは有益だと考える。

諸隈：今名前が挙がった方々は、SCEExAO チーム内部というより、近い分野の研究者という理解でよいか。

川端：その理解でよい。日本国内で分野的に近い研究者である。

宮崎：現状について説明する。前回の SAC リコメンデーション後、SCEExAO チームに Facility Instrument 化の話を伝えたが、PI である Olivier Guyon は、Facility Instrument 化のメリットが自分たちには分からないという強い意見を持っており、そこで議論が止まっている。彼にとってのメリットは、観測所がサポートをコミットする点だが、それ以外の点では利点を感じていない。

一方、SA に意見を聞くと、SCEExAO のサポートは非常に負担が大きく、仕様変更も頻繁で、業務として引き受けるハードルが高いという声がある。

観測所としては、コミュニティの需要がどのように分布しているのかを把握したい。装置チーム外のユーザーにとって使いづらいのか、突然利用できなくなった場合にどの程度の影響があるのかを知りたい。ABC がこれまで人件費を負担して SCEExAO や IRD を支えてきた経緯もあり、センター長交代後もその方針が維持されているかは確認できていない。ABC として Facility Instrument 化をどう考えているのか、現体制をどう評価しているのかについても改めて確認したい。

ABC の研究者は一般ユーザーとは異なる視点を持っている可能性がある。例えば、SCEExAO と IRD をファイバー接続して分光を行っている研究者は、Facility Instrument 化によって開発の自由度が低下することを懸念するかもしれない。多様な考えがあると想定されるため、幅広く意見を聞きたい。SAC という枠組で意見を集約してもらえると、観測所内での議論が進めやすくなる。

現在、PFS に多くのマンパワーが投入されており余裕がない状況である。仮に SCEExAO を優先する場合、他装置の優先度を下げる選択肢も生じ得る。その点も含め、SAC から明確な意見が示された場合に、観測所としてどのように対応するかを検討する必要がある。

松岡：関連して、アンケート対象を SAC および TAC に限定することに意味があるのか。

諸隈：全コミュニティを対象とする選択肢もあるが、迅速に議論を進める観点では、まず SAC・TAC に限定する方法がよいと考えている。ただし、コミュニティ全体を対象とすべきという意見が多ければ、その可能性も検討する。

武藤：アンケートの実施方法は非常に難しいと感じている。SCEXAO を実際に利用している研究者は限られている。Call for Proposals ごとの装置分布を見ても、毎回ほぼ同じグループからプロポーザルが提出されている。SAC や TAC 委員に限定した場合、SCEXAO 利用経験者はほとんどいない可能性がある。自分自身も内部事情を十分把握しているわけではなく、回答する場合は周囲に聞きながらになるだろう。サンプルとして適切かどうか疑問がある。事前に、SCEXAO の概要、開発状況、観測所の現状を整理した背景資料が必要であり、それなしにアンケートを取るのフェアではない。

宮崎：その通りである。SCEXAO に関係がありそうな人をどのように抽出するかが重要である。

井上：SCEXAO を Facility Instrument にすることは、現状の観測所リソースでは不可能だと説明されたと理解した。

宮崎：それは誤解であり、選択の問題である。

井上：ただし、状況が厳しいこと自体は事実であるという理解でよいか。PFS が多くのマンパワーを必要としている中で、SCEXAO を Facility Instrument として優先すべきかどうかをユーザーに問いたい、という趣旨だと理解した。

宮崎：PFS は最優先で運用を行う方針であり、それは変わらない。ただし、利用頻度の低い装置については優先度を下げる選択肢はあり得る。他装置の優先度を下げる可能性がある、という意味である。

井上：つまり、どの装置をどの優先度で支えるのかについて、ユーザーの認識を把握したいということか。

宮崎：その通りである。観測所内で議論を行うための、客観的な指標が必要である。

井上：一方で、広くアンケートを取ると、SCEXAO を使わないユーザーから否定的な意見が出る可能性もある。SCEXAO を使わない人は他装置を利用しており、現状維持を望む意見が多くなる可能性がある。

宮崎：確認したいのは、ハードルが高いと感じて利用を躊躇している人がどの程度いるかである。そうした人がいなければ問題はないが、過去に「使いづらい」と明言した SAC 委員がいたため、この議論が始まった。その点を明確にしたい。

井上：以前そのような発言があったのは記憶しているが、それ以外にも同様の人がいるかどうかを知りたい、ということだと理解した。仮にそうした人がいるのであれば、SCEXAO チーム側でコミュニティ拡大の努力、例えば研究会開催などで対応できないのか。潜在的には使いたい参加障壁が高いと感じている人に対し、門戸を広げる活動で対応できないのか。

宮崎：現状として、SCEXAO のプロポーザルは、スコアが高くてもマンパワー制約により不採択となることがある。提出されるプロポーザル自体が受け入れられない状況である。したがって、需要が高いこと自体は明らかであり、特に海外からの需要が高い。SCEXAO はユニークな装置であり、他ではできない観測を求める需要がある。実際、Rubin との時間交換では全て SCEXAO を用いる提案であった。また、NOIRLab 経由の案件でも需要がある。一

方で、観測所として把握したいのは、日本コミュニティの認識である。日本側の需要を正確に把握したい。

井上：想像ではあるが、広くアンケートを取っても、そもそも回答者が少ないのではないかという懸念がある。

宮崎：それも一つの結果であり、事実として受け止める。

井上：その場合は、その結果を受け入れる、という理解でよいか。

諸隈：需要が少ないのであれば、そうであるという事実を知りたい。

井上：もう一点懸念がある。広くアンケートを実施した場合、SCExAO を利用しない分野の研究者から、「内輪で装置を自由に使っている」「治外法権的ではないか」といった批判的意見が出る可能性がある。その場合、どのように対応するのか。

宮崎：そのような意見が出た場合には、現状を丁寧に説明する。治外法権的かどうかは判断してもらえばよい。観測所として隠すことはなく、すべてルールに基づいて運用している。質問には説明できる。そのような意見への対応も、コミュニケーションの一環と考えている。

井上：対応する覚悟があるということだと理解した。かなり大変になる可能性もあるが、その点は理解した。科学的成果や時間配分の合理性という点では、現状にも一定の妥当性があると感じている。一方で、アンケートを通じて内情をより明らかにすべきだという意見が出る可能性もあり、その点を含めて考えているのかが気になった。

宮崎：観測所として隠すことはない。質問には答える。個人的には SCExAO に対して特定の立場に偏った意見は持っていない。エンジニアリング時間も公平に評価しており、他の PI 装置と同様である。ただし、長期間 PI 装置として継続していること、海外からの需要が高まっている一方で十分応えられていない現状については、整理が必要だと考えている。

井上：アンケート実施の動機は理解した。観測所としてもそれを望んでいるという理解でよいか。

宮崎：その通りである。特に、「SCExAO が突然利用できなくなった場合に、コミュニティとしてどの程度困るのか」を確認したい。ただし、アンケートの対象範囲については、さらに検討が必要である。サンプルを適切に設計し、影響を受けそうな人を選んで聞く方が、リスクを低減できると考えている。

井上：同意する。広く実施する場合、背景説明資料の整備など負担が大きくなる。アンケートの目的を説明するだけでも相当な労力が必要になる。

宮崎：背景がないと、唐突に感じられる。

井上：仮に広く実施する場合でも、最初に SCExAO への関心の有無を Yes/No で尋ね、関心がある人のみ詳細質問に進む方法も考えられる。

宮崎：その点も含め、諸隈委員長と相談のうえ、改めて提案したい。

井上：了解した。

武藤：今回の議論を通じ、表に出ていない需要が想像以上に多いと感じた。その意味でも

背景情報は重要である。

宮崎：同意する。諸隈委員長とともにアンケート原案を作成し、SACで改めて確認してもらう進め方を想定している。

諸隈：アンケート内容と、対象とする人の設定の二点について考えたい。

武藤：対象については、例えば過去にすばるのプロポーザルでAまたはBカテゴリーに応募した経験がある人に限定する、という区切り方も一案である。

宮崎：意見に感謝する。その区切りであれば、観測所が想定する対象を概ね網羅でき、説明もしやすい。A・Bカテゴリー応募経験者に限定して質問を開始するのは妥当だと思う。

諸隈：多くの意見に感謝する。今後、観測所とSACの一部メンバーで引き続き検討を行い、可能であれば次回SACで具体的内容を詰める議論を行いたい。

---

#### 4. TAC report (武藤)

##### 4-1. Summary

- 武藤 TAC 委員長より S26A の採択結果が報告された。
- DPR 導入に関するアンケート報告書案が提示された。
- DPR に関しては「すぐには導入しない」方針が示されつつ、定期的な見直しや混合方式の検討可能性、海外審査員への謝礼（研究上のメリット付与等）検討が話題となった。
- 「すばるレビュー経験を CV に記載したい」という要望に対し、時期を特定しない形での記載（回数の記載等）を許容し、レフェリー依頼文テンプレートを改定する方向で整理された。
- S26B に向け、SJ 規定のマイナー改訂（サービス観測アブストラクトの別建て等）と SJ テンプレート導入（推奨、強制ではない）が共有された。リファレンスを別ページにして SJ を 3 ページ化する案は、変更影響が大きいため UM での周知等も含め継続検討とされた。
- 代替 TAC 委員は S26B では不要、S27A に備え候補者リストを維持する方針が共有された。TAC 会議日程（仕分け 3 月 9 日、採択会議 4 月 30 日・5 月 1 日、審査員候補リストアップは 2 月上旬開始）が共有された。

---

##### 4-2. Decisions

- S26B の Call において、インテンシブ比率に関する新たな制限導入等を行わず、現行方針で進める。
- 「すばるレビュー経験の CV 記載」について、時期（セメスター等）を特定しない形での記載を許容する方向で、レフェリー依頼文テンプレートを改定する方針で進める。
- S26B に向けた SJ 規定のマイナー改訂および SJ テンプレート導入（推奨）を進める。リ

ファレンス別ページ化 (SJ3 ページ化) は継続検討とする。

---

#### 4-3. Action Items

- 小山：インテンシブ比率 (20~25%等) の「目安」および根拠文書の所在を確認し、委員へ共有する (期限：確認後速やかに)。
  - 小山：レフェリー依頼文にある「非公開」「CV 記載時は連絡」等の文面・根拠の所在を調査し共有する (期限：確認後速やかに)。
  - 武藤：レフェリー依頼文テンプレートの改定案を作成し、TAC 内で回覧・反映する (期限：次回レフェリー依頼まで。目標は3月の依頼から適用)。
  - 武藤：レフェリー依頼文テンプレート改定にあたり、\*\*「時期は記載しない」「回数  
の記載は可」\*\*の方針を文面に反映する (期限：次回レフェリー依頼まで)。
  - SAC 委員：DPR アンケート報告書案にコメントを付し、公開方法・データ保管方針に関する意見を武藤へ共有する (期限：未指定、可能な範囲で早め)。
  - 武藤：SJ テンプレート導入後のフィードバック収集機会を検討・設定する (期限：S26B 採択通知後を目途)。
- 

#### 4-4. Details

武藤：S26A の統計情報について報告する。S26A は最終段階まで調整が続いたが、提出件数は 157 件 (インテンシブ 2 件を含む) であった。申請夜数は 444.92 夜である。採択は 58 件であり (インテンシブ 1 件はノーマルとして採択)、採択夜数は 107.93 夜である。倍率は件数ベースで 2.7 倍、夜数ベースで 4.1 倍であり、夜数ベースの倍率が高くなった点が今回の特徴である。新規インテンシブは 0 夜、継続インテンシブは 14.8 夜である。過去の推移を見ると、件数ベースでは大きな変化はない一方、夜数ベースでは倍率が上昇している。5 夜要求、4 夜要求といった大規模プロポーザルも増加傾向にある。

カテゴリ別の内訳は資料の通りである。A2、A3 (惑星形成・星形成・系外惑星周辺) は引き続き変動が大きく、今後も調整しながら運用することになる。応募者数に占める学生の割合と、採択者に占める学生の割合が同程度であり、学生のプロポーザルが採択されにくいといった傾向は見られなかった。

装置別の採択率は資料の通りである。PFS、HSC は引き続き採択率が低く、特に夜数ベースの採択率が低い。HDS は応募件数が多い一方で採択件数が少ない状況である。一方、IRCS は採択率が高めである。IRCS 利用提案には ToO が多く、ToO は夜数を半分としてカウントして採択するため、採択率が高く見えている可能性がある。

インテンシブについて補足する。今回のインテンシブプログラムはインテンシブとしては採択されず、ノーマルとして採択された。一方、継続分を含めたインテンシブの占有割合を示すと、S26A では 15%弱である。HSC に限ると共同利用の 40%に達している。今後、HSC については S27A または S27B までインテンシブが残る見込みである。今後の主な予定

は資料の通りである。

時間交換について報告する。Gemini-すばるは、Gemini 側の予定が確定しない状況で、すばる側の枠を選択する必要があったが、最終的にはほぼ同程度となった。Keck についても、時間交換枠は通常通り確保できている。時間交換は Keck、Gemini ともに倍率がやや高めという印象がある。

サービス観測の観測実施率は S25A までの結果であるが、ランク A はほぼ観測されているという状況である。

全体として、観測装置によって採択率に大きな差がある印象である。加えて、HSC のインテンシブが多い点を懸念している。S27A においても HSC のインテンシブが提出される可能性がある。自由な研究活動を制限することは難しいが、何らかの対策が必要かどうか、意見をいただきたい。以上が S26A のまとめである。

井上：二点質問する。第一に、HDS の採択率が低いことは以前から同様であったと記憶している。理由は、HDS に配分される夜数が少ないことにあると考える。HDS は配分夜数がかなり少なく、暗夜を利用できない。その影響が顕著に表れているのだと思う。

第二に、先ほどの SCEXAO の議論に関連するが、競争率がそれほど高くない現状があるのではないか。SCEXAO はプロポーザル提出時に PI チームへ事前にコンタクトする必要があるが、その過程で応募を制限しているようなことがあるのか。宮崎さんの「需要がある」という説明との整合性が気になった。

武藤：HDS については指摘の通りであり、暗夜が利用できない点は影響している。

宮崎：時間交換に関する状況を補足する。Rubin との時間交換を開始したが、当初は PFS での観測が中心になると想定していた。一方、相手側が PFS はまだフルスペックで動作していないことを把握したためと推測されるが、提案はすべて SCEXAO となった。夜数は 3 晩または 4 晩であった。小山さんに確認したいが、Gemini や Keck からの SCEXAO へのリクエストも多かったか。

小山：リクエストは常に多い。

宮崎：日数を絞っていることも事実である。結果として、SCEXAO チームがサポート・アストロノマー相当の役割も担っている状況であり、この点は観測所内でも懸念として認識している。

井上：国内では動きが限定的である一方、海外からの引き合いがある状況なのではないか。

宮崎：現時点では国内の引き合いは少ないが、その認識でよいのか、という点が我々の問題意識である。

井上：了解した。

諸隈：PI 装置ワークショップにおいて、Olivier Guyon さんが「プロポーザルを出したいというコンタクトがあった際に対応しきれなかった」と述べていたと記憶している。日本コミュニティ由来か NOIRLab 側かは不明だが、母数そのものが減って見えている可能性もある。推測を含むが、留意すべき点である。

宮崎：その点も含め、隠れた需要を把握する、または検証するための適切なアンケート設計を検討したい。諸隈委員長にお願いしたい。小山さんにも一緒に検討してほしい。

井上：了解した。もう一点、A3の内容を失念した。A2、A3、およびB1が廃止されA3に統合された点について、改めて確認したい。

武藤：A2は進化の進んだ系外惑星、A3は若い系外惑星・星惑星形成・星間物質である。

井上：B1が星形成であったが、それをA2とA3に含めた形で、A1が太陽系である、という理解でよいか。

武藤：その理解でよい。昨年頃まで系外惑星の提案数が非常に多く、星形成側では、いわゆる星間物質の提案がほとんどなく円盤の提案が中心で、5~6件程度という状況であった。バランスを取るため、区分を調整しリシャッフルした。

井上：了解した。

武藤：個人的には、HSCのインテンシブ比率が高い点を懸念している。今後インテンシブ応募を予定して準備している研究者がいることも把握しており、どのように扱うべきか悩ましい。この程度でSACとしてストップをかける段階ではない、という認識でよいか。このまま継続してよいか。

諸隈：結局、次に提出されるノーマルプロポーザルがどの程度出て、どの程度採択されるかが見通せない。分子は把握できるが、分母が見えない、という理解でよいか。

武藤：分母の見通しは確かに難しいが、HSCの観測ランの数からある程度は推測できる。現時点では、次のプロポーザルが出た場合、S27Aが最も混み合う時期になる可能性がある。

大栗：インテンシブの割合について、望ましい上限などの基準がどこかに明文化されているのか。

武藤：20%または25%以下という話は聞いている。どこかで読んだ記憶があり、共同利用の文書に記載があったように思う。

大栗：TAC内の了解事項ということか。岡本さんがまとめている共同利用ポリシー文書か。

宮崎：インテンシブの割合について、何らかの制限（制約）があるのか。

小山：Call for Proposalsには記載がない。過去のSACで、その程度の割合が望ましいという議論があり、それを目安として運用していると理解している。絶対にこれ以下でなければならない、という性質のものではないが、その程度を目安にTACで運用している。ただし確信はないため確認する。

宮崎：根拠となる文書を確認してほしい。SSPを共同利用の半分以下にすることは把握しているが、インテンシブについては把握できていない。判明次第、委員へメール連絡してほしい。

小山：了解した。

大栗：根拠があるなら、その根拠に基づき制限を検討すべきである。インテンシブはセメスターを跨ぐため、現時点で多く採択すると将来のセメスターにおいてもその割合が増大し得る。将来RomanやRubinが導入され全体枠が減ると、インテンシブが過半数を占める

可能性もある。現時点だけでなく、将来セメスターへの圧迫を避ける観点が必要である。  
井上：HSC のインテンシブ比率は、自分が TAC 委員長を務めていた時期がピーク付近であった。

井上：私の前任の TAC 委員長の本原さんから引き継ぎ時に「高くなりすぎているので注意が必要」と指摘されたが、割合について数値目標があったとは記憶していない。60%を超えていた時期もあった。その後、自分が委員長を務めていた期間は、特段の制限を設けなくても自然に減少した。注意喚起を受けて監視するためのプロットを作成したが、具体的なアクションが必要となる局面はなかったと記憶している。

武藤：自分も「全体で 20%または 25%」という目安は引き継いでいる。ただし、解釈には幅があり得る。

井上：自分の認識では数値目標はなかった。私の後任 TAC 委員長の植村さん宛てに作成した申し送り文書を見返すと、「20%未満、HSC でも 20%未満程度であり適切に思われる」と記載がある。これは当時の現状を記述したものであり、目安として提示したものではない。これが目安と受け取られていたのであれば誤解である。

武藤：植村さんの時期は、毎セメスター、割合を確認していた。分母・分子の定義が難しく、SSP をインテンシブ扱いにするか、SSP を夜数から除外して割合を計算するかで数値が変わる、という議論もあった。それでも数字をウォッチし、20%・25%という値を見ていた。どこかで決まった数字だと理解していたため、現状は割合が高いと感じていた。

井上：自分の記憶では数値目標はなかった。

武藤：伝言の過程で意味合いが変化した可能性がある。了解した。改めて意見があれば伺いたい。HSC の 40%という状況が、共同利用全体の観点から手を打つべき水準と考えられるかどうか論点である。

諸隈：現状、点数の高い HSC プロポーザルが不採択となっているという状況はあるのか。

武藤：HSC は現状、致命的な状況ではない印象だが、ボーダーライン付近で逆転現象が起きていた記憶はある。深刻な状況ではない。PFS でも点数が高い課題が不採択となることは起こり得るが、一定程度やむを得ないとして扱っている。強い反対意見がなければ、S26B の Call for proposals では特段の対応は行わず進めたい。仮に S26B で「HSC のインテンシブをやめる」「PFS のインテンシブを実施しない」といった対応を取るのであれば、本日が意思決定の最終機会である。

続いて、DPR 導入に関するアンケートについて報告する。DPR 導入に関するアンケート報告書を作成した。

コメントがあればお願いしたい。意見を伺いたい点は、アンケートを実施した以上、どこかで結果をリリースした方がよいと考えるが、そのリリース方法をどうするか、またデータ保持方針をどうするか、である。アンケート内容および結果の生データは、最終的には国立天文台に渡して保管してもらうのがよいと考えている。

結果概要として、海外審査員数は現状が適正よりやや多いと感じる人が多かった。審査方

式は全体として審査員方式（パネルレビュー）が支持された。ただし若手層には DPR を受け入れてもよいという意見が一定数あった。審査員方式と DPR の混合を提案する意見も複数あった。

本結果を踏まえた方針として、海外審査員数はカテゴリ当たり 2 名を目標とし、依頼を断られ不足した場合は 1 名以下でもよい、という運用を想定している。海外審査員への謝礼についても検討し得るが、金銭は現実的ではない。一方、研究上のメリットとして国内枠でプロポーザルを提出できるようにする等の案はあり得る。

審査方式については、DPR は直ちには導入しない。ただし無視することもできないため、状況を見ながら定期的に議論する機会を設けるのが望ましい。DPR・審査員方式の混合については、基本は審査員方式としつつ、審査員の一部を提案者に依頼してもらう形が考えられる。事前の審査依頼人数を減らせる利点がある一方、提案者側の負担不公平が生じ得る。その他として、審査員に要求するランク付けを細かな順位ではなく ABC 程度にする案、SJ テンプレート導入案、すばるレビュー経験を CV に記載したいという要望があった。レビュー経験はコミュニティサービスであり、CV に記載可能であればプラスである。観測所として表現を明確化してよい論点である。以上が DPR アンケート報告である。

大栗：CV への記載については早急に対応すべきである。記憶では、すばるのレビューを担当した際、あまり公表しないこと、記載したい場合は申し出ること、という趣旨の記載がどこかにあったと思う。ただし、その規定を設ける意味は明確ではない。レビューを担当したことは業績であり、引き受け手を増やす観点からも、制限を設けず CV に記載できるようにすべきである。

冨永：TAC 委員を務めていた際にも同様の話題があった。審査員が非公開であることが理由だったと理解している。ただし、担当時期を明記しないのであれば記載は可能とし、ルールを整備すればよい。

武藤：個人的には、審査終了後は審査員名も公開してよいと考える。

松岡：審査が終了し採択課題が公開された後であれば、非公開とする合理性は薄い。JWST ではレビューを行うとサーティフィケートが送付され、公開が前提とされている。隠す必要はないと考える。

井上：注意が必要である。現時点の TAC 運用は把握していないが、以前は複数セメスターにわたり連続して依頼する慣例があった。もし現在も同様であれば、直ちに公開することは難しい。

武藤：その慣例は現在行っていない。むしろ、その慣例が存在したこと自体が引き継がれていない。自分は把握していなかった。

井上：建前としては各セメスター独立であるが、実際にはカテゴリ側の裁量で 2 セメスター程度継続して依頼することがあったと思う。3~4 セメスター連続は避けていた記憶がある。

冨永：過去には 4 セメスターが上限という記憶がある。慣例かルールかは不明だが、4 セメスター以上は不可と言われた記憶がある。

武藤：自分は把握していなかった。

宮崎：この観点は意識していなかった。個別性が高いため、次期審査員に就任していない人について公開することは可能かもしれない。ルールのあるなら把握したい。神戸さんまたは小山さんに、文書として残っているか把握しているか確認したい。

小山：審査員はTACの裁量で決めている。明文化されたルールはないと思う。

武藤：少なくとも任期がルールとして定まっているという認識はない。各セメスターの審査は独立しているという認識である。

井上：建前はそのとおりだが、実際には連続セメスターで依頼するケースが多かった。ルールを公開しない方がよい。「今回担当したから次は担当しない」といった予測を持たせることは望ましくない。建前は独立だが、実運用としては2セメスター程度継続し、最大でも4まで、という運用だったと考える。これは慣例である。

冨永：最近、審査コメントに沿って修正したにもかかわらず、次の公募では別の指摘を受けることがよくある。審査員が頻繁に変わることに関係している可能性があり、良し悪しの検討余地がある。

井上：コメントに沿って修正しても担当者が変わり逆の指摘を受けることはよくある。議論が少し逸れたため戻す。CVへの記載はよいが、審査員名を直ちに公開する点は注意が必要である、という意見である。

小山：審査員公開は大きな変更であり、方向性について議論が必要である。直後に公開するのではなく、一定期間を置いてから、という考え方もあり得る。同一人物が想像以上に審査していることが示されるのは望ましくない可能性がある。一方で、審査を担当したことは事実であり業績でもあるため、名前を出すべきという意見も理解できる。直後ではなくても、名前を公表する方向であれば対応は可能である。

諸隈：目的の問題である。「すばるのレビュー経験がある」というレベルでよいのか、担当時期まで含めることが重要なのかで扱いが変わる。「経験がある」ことを示すレベルであれば、CVでもウェブでもOKだろう。一方で、「いつ担当したか」を公開する点は意見が分かれる可能性がある。

宮崎：アンケートでCV記載要望を書いたのは何人か。

武藤：自由コメントで1人である。匿名であり、連絡先は収集していない。

宮崎：まず、「記載してはいけない」というルールがどこかに存在するかが論点である。要望が出たのは、記載してはいけないと考えたためだろう。根拠文書を特定し、改定する方向が最もシンプルである。「担当時期は書かない」というルールにするのがよい。

武藤：自分も以前問い合わせた記憶がある。その際、あまり前向きではない返答だった気がする。相手は当時所長の有本さんだったと思う。

宮崎：文書があるなら特定したいし、なければ新たに決めればよい。

小山：「載せたい場合は相談してください」という記載がどこにあったのか。レフェリー依頼文である可能性がある。自分の記憶は薄いですが、複数人が言及しているため、どこかにあ

るはずである。調査する。

宮崎：文書があれば、それに一文追加すればよい。「CV への記載は差し支えないが、時期が特定される表現は避ける」とするのが安全である。

武藤：その程度でよいと思う。

諸隈：その結論が妥当であると考えてる。

松岡：最近のレフェリー依頼メールを確認したところ、Important Notice として「あなたがレフェリーであることをオープンにしないでください。過去にレビューしたことを CV に書きたいときは [prores-sbr@ml.nao.ac.jp](mailto:prores-sbr@ml.nao.ac.jp) にメールしてください」と記載がある。

宮崎：最近どこかで変更された可能性がある。テンプレートを書き直すことは可能である。TAC 委員長の判断として、この SAC で問題ないという合意が得られれば、観測所としても問題ない。神戸さんの意見も伺いたい。

神戸：全面公開ではなく、記載したい人に許可する形であれば問題ないと思う。

宮崎：全面公開は継続審議とするが、この要望への対応は早急に進められる。

武藤：担当時期を明示せず、「すばるのレフェリーを務めた経験」を記載できる方針とするなら、それに沿ったレフェリー依頼文案を作成する。文面の原典は今西さんに確認が必要だが、調整のうえ文案を TAC に提示しコメントを得る。メールで完結するなら今月中に作業し、次回のレフェリー依頼から実装できる。

宮崎：委員の合意が得られるなら、その方針で問題ない。

武藤：次回のレフェリー依頼は 3 月である。いずれにしても間に合う。

和田：「どの時期のレフェリーであるかは記載しないでください」と明記した方がよい。回数記載可とするのがよい。期を記載すると公開と同義になる。

武藤：了解した。回数のみとし、期は記載しないこととする。

諸隈：武藤さんの提案した進め方で進めることとする。

武藤：次に、S26B に向けた準備状況について報告する。以前共有した内容のマイナー改定として、SJ 規定改訂および SJ テンプレートについて、大きな懸念がなければこのまま進めたい。Call for Proposals は 2 月上旬であり、承認が得られれば作業を進められる。SJ 規定改訂案およびテンプレートは資料の通りである。テンプレートはマイナー変更のみであり、図が全体の 4 分の 1 程度を占めても収まるよう、行間をやや狭くした。TAC からは、リファレンスを別ページにした方が使い勝手がよい、という意見があった。本文 2 ページ、リファレンス 1 ページとすることでページ数は増えるが、次回から実装するか判断に迷っている。規定として明記することは可能である一方、テンプレート導入など変更点が多くなりすぎる懸念がある。テンプレートは必須ではなく既存ファイルの使用も可能とする想定だが、ページ数が増えることを認識しない提案者が出る懸念もある。段階的に進めた方がよい、という印象である。リファレンス別ページ化の是非について意見をいただきたい。

代替 TAC 委員については、次回 CFP では必要なくなった。ただし、別途準備を進めていた代替 TAC 委員候補者のリストについては、今後必要となった時に備え、共有しておく。 仕

分けの会は3月9日、採択会議は4月30日および5月1日である。審査員候補者のリストアップは2月上旬（CfP リリース後）から開始する。最後に、リファレンス別ページ化について意見ををお願いしたい。

諸隈：SJのページ数については大きな変更となるため、UMを挟むのがよいと考える。UMで周知し、口頭で説明したうえで次のセメスターから実施する方が安全である。3ページ化できるのであれば、リファレンスだけでなく図の扱いも含めた議論があり得る。何を認め、何を認めないかを整理し、UMで周知するのがよい。

冨永：本文中にリファレンスを書き込む人もいる。まとめたリストを付けない形式の人もいるため、変更には難しい面がある。

武藤：元の意見は、本文をできるだけ書きたい一方で、リファレンスを調整する手間が大きい、というものである。JWSTはリファレンス別ページであり、サイエンスに集中できるという体感がある、という意見であった。

松岡：本文を多く書くためにリファレンス数を節約するのは望ましくない。ページリミットのために必要なリファレンスが記載できないのは公正ではない、という考え方である。

諸隈：アイデア自体は真剣に検討すべきだが、次回実装は行わない、という結論でよいか。

井上：SJテンプレート利用を将来的に強制する方向性はあるのか。

武藤：現時点ではまだ決まっていない。

井上：将来的には強制した方がよいと考える。自由書式で詰め込み、分量が実質的に大きく異なるケースがあり、不公平である。統一テンプレートを強制し、そのタイミングで「図込み2ページ、リファレンスは3ページ目以降」といった形にするのがよい。今回はテンプレート導入が推奨で強制ではない以上、リファレンスの扱いは従来どおりでよい。3ページ化は支持するが、テンプレート強制の時点で導入すればよい。

冨永：SJフォーマットの強制は避けた方がよい。Word利用者もLaTeX利用者もおり、どちらに統一するかが難しい。途中で変更すると一方に不利が生じる。

井上：フォーマットが揃っていないと文字数が事実上自由になり、不公平である。統一テンプレートとすべきである。書式に合わせるのが面倒であれば努力すべきである。

冨永：どちらに合わせるかが問題である。LaTeXに不慣れな人にはハードルが高い。図の貼り込みもLaTeXでは手間であり、ハードルを上げるのは望ましくない。

武藤：強制する場合、LaTeX版とWord版の二種類を用意する形でもよい。

諸隈：それだとメンテナンス負荷が高くなる。今回は少なくとも「使いたい人は使ってよい」という形で開始し、利用状況や意見をモニターするのがよい。

武藤：S26Bの採択通知後あたりでフィードバックを得る機会を設けたい。UMで意見を集めることも考えられる。UMは7月なので検討する。テンプレートの使いやすさ等も含めて意見が出るだろう。リファレンス別ページについても賛否が分かれている。

諸隈：次回以降、適切なタイミングで議論したい。

---

## 5. PFS Community Filler (諸隈)

### 5-1. Summary

- ・ PFSで「全天に分布する希少天体」を効率よく観測できるよう、Community Fillerの枠組みを再検討するWG(但木さん主導)の検討が始まっている。
- ・ 委員間で「Community Filler再考」の理解に齟齬があり得るため、今日の主目的は報告ではなく前提のすり合わせである。
- ・ 論点は、(1)既存Community Filler枠組み全体を修正して置き換えるのか、(2)既存枠組みの一部を残しつつ、残さない部分をノーマル提案枠(新規枠組)として作るのか、である。現時点では(2)の理解が有力である。
- ・ 希少の定義、複数プログラムが競合した場合の扱い、レビュー方法の見直し要否などは、WGで整理する。

---

### 5-2. Decisions

特になし

---

### 5-3. Action Items

特になし

---

### 5-4. Details

諸隈：PFSのCommunity Fillerについて。希少天体が観測される可能性を上げるよう、ファイバーが割り当てられる仕組みを但木委員にリードしていただき検討を始めている。今回は私のミスで、但木委員が参加できない時間帯になってしまった。今日は検討状況の報告ではなく、委員間の理解を揃えて齟齬をなくすことが目的である。前回の12月分議事録に対する松岡委員のコメントを見て、枠組再考の意味に齟齬があるかもしれないと気付いた。

諸隈：WGの命題は「全天に分布する希少天体」を効率よく観測できる枠組みを考えることである。但木さん提案の方向性として、Community Fillerをノーマルプロポーザルとして提案してもらい、審査を経た上で、ファイバーの当て方や夜数カウントの方法を検討する、という整理がある。ここで「再考」の意味が、

(1) 既存Community Filler枠組み全体を修正して置き換える

(2) 既存枠組みの一部を残し、残さない部分を新しいノーマル提案枠として作る(新しい枠組みを増やす)

のどちらなのかで委員の理解が分かれている可能性がある。自分は(1)だと思っていたが、松岡さんのコメントは(2)の理解に見えた。但木さんも(2)のつもりであった。

現時点で(1)か(2)を決めたいわけではないが、おそらく(2)的な考え方になる、という前提を

共有したい。コメントがあればお願いします。

希少天体の定義（但木さんが「1 視野あたり 10 天体」という数字を挙げていた）や、複数のフィルターのプログラムがあり全て全天で観測したい場合に、常に優先度の高いプログラムが勝つ状況が起こり得ることなど、細部は WG で定義する。

武藤：自分も(2)だと思っていた。ただ、検討の結果としてノーマル枠へ移す部分が増え、Community Filler のプロポーザルが今よりさらに減る、あるいは無くなる、という状況になって初めて、「Community Filler をやめるか」という話になるのだろうと考えていた。

諸隈：同意する。減る可能性があるなら、レビュー方法も真剣に考え直す必要がある。その点も検討事項の一部になるはずである。

武藤：レビュー方法については、現状でもだいぶ苦しい。

諸隈：その点も注意しながら検討を進める。

---

## 6. ToO Trigger Duplication（諸隈）

### 6-1. Summary

- ToO トリガー重複時の優先順位・調整方法が不明確で、現状ルールがない。発生頻度は高くないが、重要イベント天体に関わる可能性があるため、ルール整備が必要との認識で一致した。
- 重複には大きく 2 種類あると整理した。
  - ① 採択プロポーザル段階で、サイエンスや狙いが類似しており将来的にトリガー重複が起こり得るケース（事前に同定し、共同研究を推奨・調整する）。
  - ② 実際にトリガーが同時に重複するケース（共同研究が成立しない場合は早い者勝ちとし、データ共有の仕組みを検討する）。
- 調整を担う ToO コーディネーターグループを設置する案を提示。初期段階では日本側 TAC に 1 名を追加する方向が妥当と説明された。
- データ共有の範囲は「コーディネーターが重複可能性を同定し、共同研究調整を行った案件」に限定する想定である。
- 手順やポリシーをどこかで可視化・周知する必要がある（CfP、ポリシー文書、採択通知等のどこに書くかは要検討）。
- time-critical 観測の衝突は基本的にスケジューリング段階で調整されるため、ToO と性質が異なるため、別枠で考える可能性もある。
- データ共有を行う場合の夜数（時間）消費・配分の考え方について、クレームになり得る重要論点として指摘があり、定義が必要と確認された。
- 全体として提案の方向性に同意し、UM で紹介・議論した上で導入する方針で進めることとなった。

---

## 6-2. Decisions

- TACに「ToO コーディネーター」を立てる方針とし、細部を詰めた上で UM で紹介・議論し、可能であれば 2026 年 UM 後のセメスターから導入する。

---

## 6-3. Action Items

- 諸隈：ToO コーディネーター設置案について、未確定事項（データ共有範囲、夜数配分の考え方、周知方法、time-critical との切り分け等）を整理し、UM で提示できる形にまとめる。
- 諸隈・武藤・小山・富永：コラボレーション決裂時の「データ共有」および消費観測時間・公平性の扱いについて、定義を UM までに詰める。
- 観測所・武藤：提案者が事前を知るべき事項として、Call for Proposals／採択通知／観測ポリシー等のどこに、どの粒度で記載・公開するかを検討する。

---

## 6-4. Details

諸隈：ToO のトリガーが重複した場合の取り扱いについては前回も議論したが、結論には至らなかった。そこで、先日追加で議論を行った。富永さん、武藤さん、小山さん、諸隈の 4 名で 1 時間弱話し合い、適切な落としどころを検討した。

従来の想定としては、例えばすばるコミュニティ、日本のコミュニティ、メキシコのコミュニティ、Gemini 側などから複数の ToO プロポーザルが提出され、採択され、同じタイミングでトリガーがかかった、あるいは同一天体がターゲットになった場合に、どのように調整するのかわからないのか、どちらを優先するのが不明確で、ルールもない状況である。頻度は高くないが、希少事象であるがゆえに重要なイベント天体である可能性もあるため、ルール整備を進めた方がよいという認識に至った。これまでの案としては、早い者勝ちとする、セメスターごとに順番を決めて順位でソートする、といった複数（3 つ）のアイデアがあったが、別の考え方がより適切ではないかという結論に至った。具体的には、ToO の調整を担う担当者（ToO コーディネーター）を置き、少なくとも初期段階では実務的に TAC に 1 名増員する形がよいのではないかと、という提案である。

状況整理として、ToO トリガーの「重複」には大きく 2 種類があると考えられる。

第一は、トリガーそのものというより、ToO で実施したい内容が重複している場合である。採択プロポーザルが出揃うと、一定程度その重複は把握できる。サイエンスが類似しており、トリガーも重複し得る状況であれば、その段階で ToO コーディネーター（グループ）が重複しそうなプロポーザルを同定し、「このプロポーザルとこのプロポーザルは重複しそうなので、共同研究を検討してほしい」といった調整を行う。これは採択プロポーザルが出揃ったタイミング、すなわちセメスター開始前に可能な限り実施する。もちろん交渉が決裂する可能性はある。

第二は、トリガーそのものが実際に重複する場合である。共同研究が成立し、共同で実施する場合は、その中で相談が行われるはずであり、トリガーの重複は起きにくいと想定される。ただし、予想外の状況や、共同研究交渉が決裂する場合もあり得る。その場合は、早い者勝ちとする案である。トリガー発生直後に追加交渉を行う余地はあり得るが、基本方針としてはシンプルに早い者勝ちとする。ただし、観測所として共同研究を推奨・議論の機会を調整した経緯があり、話し合いが決裂した場合でも、観測を実施した側のデータをもう一方のグループにも共有する仕組みを設けてはどうか、という提案である。すなわち、早い者勝ちで負けた側にもデータを提供する。

これらを取り仕切るのが ToO コーディネーターグループであり、将来的に複数人となる可能性があるため「グループ」と呼ぶ。まずは日本コミュニティの TAC に ToO コーディネーターを 1 名置き、SAC が最終的に指名する形で、他の TAC 委員と同等の扱いで増員する。実務としては、この ToO コーディネーターグループ、TAC 委員長、観測所のサイエンス観測運用のチーフである表さんで進める。他パートナー（メキシコ、NOIRLab 側等）には、この運用方針自体を共有し、人員を出したいという希望があれば、ToO コーディネーターを出してもらい、グループを形成することにしたい。少なくとも日本側 TAC では、現状 ToO プロポーザルが多い B3 カテゴリーの主担当とは別の人でまずは開始したい。ただし仕事量（ToO 重複プロポーザルの発生頻度等）は見通しにくく、今後とも変化し得るため、まずは今の TAC 委員とは独立に人を立てて様子を見て、将来、兼任でも可能と判断できれば兼任とすることもあり得る。これは今後の状況を見ながら議論する。

ToO に限らず、特定日・特定時刻に観測したいタイムクリティカル観測についても、プロポーザルが出揃った段階で把握できるため、同様にケアすることを想定している。重複になるが、仕事としては、トリガーが重複し得る異なる TAC からの ToO プロポーザルを同定し、コラボレーション調整の機会を設ける。これは ToO に限らずタイムクリティカル観測も同様である。

この担当者の業務は基本的に上述に限り、他の TAC メンバーが行うような通常業務は担わない。特定カテゴリーの担当にはならないことを基本とする。仕分け会への出席は必須ではなく、採択会議も出席が望ましい程度がよいのではないか。ただし、インテンシブプログラム等、特別扱いが必要なプログラムについては担当を依頼する余地は残す。以上が提案である。この案について意見があれば伺いたい。突然の提案である点も踏まえ、特に懸念があれば指摘してほしい。

松岡：全体として良い案だと思う。ただし、この ToO コーディネーターは TAC の一員である必要があるのか。観測所の誰かが長期的に担うよりも TAC の人が担う方がよい、という意図なのか。提案内容を見ると、仕分け会への出席も必須ではなく、会議にも出ないのであれば、TAC の一員である必要はないようにも思える。

諸隈：それはもっともな懸念であり、その点は議論した。現実的な問題として、現状の観測所メンバーの中に ToO コーディネーターの役割を適切に担う適任者がいない、という状

況がある。一方で、必ずしも TAC でなければならない理由が他にあるかという点については、武藤さん、覚えているか。

武藤：仕事内容として科学的判断が必要である。サイエンス面の検討が必要であり、突発天体研究の状況等をよく理解している人がこの役割を担う必要がある。観測所内の「誰でもよい」という仕事ではなく、科学に基づいた判断が求められるため、TAC メンバーが担うのがよいのではないか、という議論であった。

諸隈：補足すると、観測所に ToO コーディネーターを長期的に担える人材が一定期間存在するのであれば、そもそもこの仕組み自体が不要になる可能性もある。ToO がトリガーされた際に、その人が責任を持って科学的に判断し、どちらを優先するかを振り分けられるからである。しかし現状ではそれが難しいため、TAC に科学的判断が可能な方を 1 名加える、という提案である。

大栗：自分も基本的に良いと思う。ただし、「SAC が指名」とある点について確認したい。TAC は形式上、全員 SAC が指名することになっているが、それと同じタイミングで他の TAC 委員を決める際に、この ToO コーディネーターも同様に決める、という理解でよいか。

諸隈：その通りである。

大栗：現在は 2 年ごとに半分ずつ改選しているが、例えばこの担当者は 4 年任期、すなわち通常 2 期を想定するのか。

諸隈：その通りである。

大栗：つまり 4 年ごとに入れ替わるイメージか。

諸隈：そこまで細部は検討できていない。最初にどのタイミングで指名し、どのように人選するかも含めて、具体案はまだない。ただしベースラインとしては、大栗さんが述べたような形になると考えている。

武藤：おそらく最初だけ移行期として中途半端な形になるのではないか。メキシコが参加するタイミングなどが関係する。

諸隈：実施するのであれば、できるだけ早い方がよい。メキシコについては（後ほど小山さんの話もあるが）すぐには始まらない可能性があり待てるかもしれない。一方で NOIRLab 経由で ToO プロポーザルが出てくる可能性もあり、重複が起こってしまってから対応すると遅い。次セメスターから動けるよう準備した方がよい。

松岡：細かい点としてもう一点ある。ToO トリガーがかかったタイミングで話し合いが決裂した場合にデータ共有を行うというが、これは問題ないか。決裂した両グループにデータが配布される。一方で、プログラムを設計したのは早い者勝ちで勝った側であり、その点が懸念である。ここでいう共有は、ToO コーディネーターが「このプロポーザル同士は調整すべき」と同定したグループにのみ共有される、という理解でよいか。

諸隈：その通りである。

松岡：つまり、コーディネーターに同定されなかった提案者には共有されない、という理解でよいか。

諸隈：その通りである。

松岡：ここはコーディネーターの裁量が重要になり、コーディネーターグループの判断でデータ共有範囲が決まるのは、懸念がある。早い者勝ちのグループだけにデータが渡る、という方が単純ではあるが、それでは乱暴だという考え方か。

諸隈：懸念は理解できる。だからこそ ToO コーディネーターは、プロポーザルを読んでサイエンスを理解できる人に担っていただきたい、というロジックである。懸念がある点は認識している。

松岡：細部なので、詰めていく段階で検討すればよい。

諸隈：指摘も含め、詰め切れていない点を詰める作業は必要である。ただしベースラインとして、この方針に同意できるかを確認したい。これは Call for Proposals に記載する話ではないが、観測所間・パートナー間で今後共有する話をしており、「こう運用する」ということは一定レベルで外部に伝える必要があると理解している。

武藤：手順と、データ共有を行うという大枠のポリシーは公開した方がよいと思う。Call for Proposals に書くのか、観測ポリシーの形にするのかは検討が必要である。

諸隈：Call for Proposals にはこれまでこの種の事項は記載してこなかったため、追加で書く必要はないという理解である。一方で、採択通知や、いま述べたようなポリシー文書など、どこかには可視化する必要があるのは確かだと思う。

武藤：提案者の立場では、自分のプロポーザルが採択されたと思っていたところ、ある時点で突然コンタクトが来て調整を求められると、面食らう。いきなりコラボレーションを求められることになる。

諸隈：その通りである。

武藤：少なくとも提案者は、ToO を提出する以上このような可能性があることを、事前に知る機会があった方がよい。

諸隈：確かにその通りかもしれない。Call for Proposals に一文追加する可能性を検討した方がよさそう、ということだと思う。たしかに採択通知直後に「共同研究せよ」と通知が来るのでは遅く、急すぎる。

武藤：整備は次の Call for Proposals でなくてもよいかもしれないが、直近でこのような事象が起こらないことを願いつつ、という状況である。

小山：指摘はその通りで、これはかなり大きな話である。UM を経た後のタイミングの方がよいかもしれない。今回、Call for Proposals に記載しただけでは、「聞いていない」という人が出る可能性がある。

もう一点、ToO コーディネーターが time-critical も扱うという点についてだが、time-critical は分けた方がよいと考える。採択課題が出る段階ではスケジュールはすでに確定しており、その時点で time-critical の衝突は調整済みである。通常、衝突が起きる場合はスケジュール段階で各パートナーに問い合わせ、この日は外せないため当該課題は受け付けられない、などの調整を行う。したがって、採択後にいつトリガーされるか分からない ToO

の調整が主業務になると思う。

諸隈：その場合、**time-critical** の重複課題は誰がケアするのか。TAC 委員の担当者か。

小山：明確な手順が確立しているわけではないが、スケジュールリングしてみて同日に観測したい課題が他パートナーから来た場合、優先度などを見ながら相手と話して決める。これはほとんど起きない。**time-critical** 課題は各パートナーがバックアップ課題を持っているため、「入らない」と言われたら別案へ切り替えるなど、時間をかけた調整ができ、大きな問題になりにくい。

武藤：その部分もコーディネーターが関与してよいと思う。

小山：その場合は一段階早く、スケジュールリング段階で関与する、ということになる。

武藤：その意味でも、少なくとも日本側では採択会議に出席することが望ましい。採択課題一覧は把握しておいてほしい。

小山：**time-critical** と ToO では性質が異なる、というコメントである。

諸隈：先ほど「タイミングは2つ」と述べたが、実際には3つになる可能性がある。採択プロポーザルが出揃う前にスケジュールリングするタイミングが入り得る、ということか。**time-critical** を含めるとそうなるのか。

冨永：割り付けは、採択プロポーザルが出揃った後に行うのではなかったか。

諸隈：「出揃った」の意味が自分も曖昧である。

武藤：基本は、採択して時間を割り付け、割り付けられなかった分は再度採択をやり直す、というイタレーションが入る。

諸隈：ここでいう「出揃った」は最終確定した段階、ということか。

武藤：ToO の場合はその理解になるはずである。ToO でない場合も、例えば時間交換枠では Gemini に対して「このプロポーザルの観測をしてほしい」と依頼し、Gemini 側で不可となればプロポーザルを差し替えて別案を依頼する、といったイタレーションがある。その過程から入ってくるイメージである。

小山：了解した。それは助かる。そうすると、その段階で一度仕事が発生し、ToO については ToO で別に仕事が発生する、という構造になる。

武藤：ToO はスケジュールリングしないが、タイミングが多少ずれる。

小山：ToO は一度 TAC で採択されれば、当該課題はスケジュールしないので採択は確定である。その意味で、仕事が発生するタイミングが異なる。

諸隈：担当者は1名でよいか。

武藤：問題ないと思う。時期がずれるなら専門性の問題は多少あるが、より大きな問題は ToO である。**time-critical** は時間交換なども含め、割り付け作業は観測所が一定程度担っており、観測所に対応困難になった段階で相談する、という運用でもよいと思う。

小山：発生頻度も低いので、その程度でよい。科学的観点から意見を求めたい相手として位置づけるなら、ほとんど発生しないと思う。

諸隈：了解した。細部の修正は必要だが、TAC に1名、ToO コーディネーターと称する担

当者を加える。導入は UM を経てから、という結論でよいか。先ほど挙げた細部についても、それまでに詰める時間はある。次セメスターでは何も起こらないことを祈りつつ、UM で議題にする、という方針でよいか。UM 直前にも細部の議論が必要になれば改めて相談する。

川端：細かい点として、データ共有が気になっている。完全一致ではなくても重複するケースはあり得る。例えば超新星の「このタイプ」と言っても初期は分類が十分でないことがある。そのような場合に、相手グループと共同する／強制的に共有となったとき、夜数配分がどうなるかが気になる。共有したグループの分だけ後回しで夜数を割り当てるのか、あるいは消費扱いになるのか。こうした点が絡むと慎重にならざるを得ない。強制共有に慎重なグループもあり得るため、混乱の可能性はある。直ちに決める必要はないが、詰めておいた方がよい。

諸隈：夜数をどう分配するか、あるいは分配しないのか、という議論は（おそらく）行っていなかった記憶があるため重要である。

小山：共同研究であれば、相手が 1 晩、自分たちが 1 晩を持っている場合、実質 2 晩分を使える、という発想であった。

諸隈：ここで問題にしているのは、共同研究の交渉が決裂した場合である。

小山：決裂した場合、それぞれが 1 晩ずつ、という理解でよいか。

諸隈：それぞれが 1 晩ずつである。ただし、早い者勝ちで勝った側はその 1 晩を消費する。一方、データは早い者勝ちで負けた側にも共有される。その場合、負けた側の夜は消費されない。それでよい、という提案である。

小山：その意味か。それは問題になり得る。

諸隈：問題ではない、という結論もあり得る。

小山：了解した。

諸隈：その観点は抜けていたと思うため、クレームが出る可能性はある。事前に決めておく必要がある。

小山：早い者勝ちで勝った側は、自分たちの意図どおりに観測を設計・実行できる特権があるので、それでよいのではないか、という感覚もある。データが共有されるとしても、負けた側が望んだとおりのデータになるとは限らないため、その点で相殺されるというイメージであった。ただし確かに重い論点であり、「負けた側は夜を消費せずにデータを得る」という整理になる。

富永：逆に、消費しなかった側が後日観測した場合もデータは共有されるので、お互い様という考え方もある。

小山：確かにその通りである。

諸隈：いずれにしても、定義しないと揉める可能性があるため、UM までに詰める。

それでは、ToO コーディネーターを立てる方針を決定とし、細部を詰めて整理したうえで、UM で紹介・議論し、可能であれば次セメスターから導入する方針を進めたい。

---

## 7. Subaru UM 2026（諸隈）

### 7-1. Summary

- 2026年のすばるユーザーズミーティング（UM）を7月上旬（JST）に開催する方針で準備を進める必要があり、日程確定と大セミナー室の確保、および世話人の決定を早めに行う必要があることが共有された。
- 曜日は例年どおり火・水・木（JST）を基本としつつ、前年は事情により水・木・金で実施したことも踏まえ、検討することとした。
- 大きなイベント（研究会等）の有無について委員から情報提供を受け、候補を絞り込み、遅くとも次回 SAC で UM 日程と世話人を確定する方針が共有された。

---

### 7-2. Decisions

- SPIE 開催週（7月6日の週）は、UM 候補として避ける方向で検討する。

---

### 7-3. Action Items

- SAC 委員：7月上旬の候補週周辺で、UM 日程に影響し得る大きなイベント（研究会・国際会議等）の情報を諸隈へ共有する（期限：2026年1月下旬（来週中）を目処）。
- 伊王野：TMT セッションを UM から切り離して開催する可能性について、TMT-J-SAC で議題として挙げて議論し、状況を共有する。
- 諸隈：委員からの入力を踏まえて候補日を絞り込み、必要に応じてアンケート等も用いつつ、次回 SAC までに UM 日程案を整理し、大セミナー室確保の準備も進める。
- 諸隈：次回 SAC で世話人を決定できるよう候補を検討する。

---

### 7-4. Details

諸隈：2026年のすばるユーザーズミーティング（UM）を7月上旬に開催する方針としており、そろそろ日程を確定する必要がある。今日の会議で即決したいわけではないが、できるだけ早期に決めたい。

曜日は例年通り JST で火・水・木を基本と考えている。昨年は PI 装置 WS を UM 前に行った関係で水・木・金で実施した。基本は火・水・木と考えている。

7月上旬の候補日として、火・水・木・金の4日分を3週間分、検討している。なお、6月30日は大セミナー室が特別な理由で埋まっているとのことで、候補から外す。前後1週程度ずらす可能性もあり得るが、いずれにしてもこの時期に大きなイベントがないかどうか、皆さんから情報提供をお願いしたい。

宮崎：7月6日の週は SPIE がある。ただし、必ずしも気にしなくてもよいかもしれない。

諸隈：しかし重要な研究会ではないか。

宮崎：服部さんらは SPIE に行く可能性が高い。ただし、参加できる人数は限られる。

諸隈：SPIE の週は避けるべきであると考え。米国独立記念日(7月4日)は何か影響はあるか。

宮崎：Mauna Kea Observatory のセッションがその時期に当たると気になるが、通常は会期中日に配置される。

諸隈：この週だとそのセッションは7月2日となるだろう。

宮崎：それなら問題ないのではないか。土曜日に UM は実施しないだろう。仮に1・2・3日(JST)で実施する場合、ハワイではその前日に当たるため影響は小さいと考える。土曜日を候補から外しているなら、問題ないと思う。

諸隈：了解した。SPIE 以外にも大きなイベントがあれば教えてほしい。また、TMT のセッションについて、ここ2年は UM 内で実施してきたが、TMT の J-SAC 側では、すばる UM とは切り離して半日または1日で実施する可能性を議論していたと記憶している。この点をどの程度考慮すべきか、伊王野さん、情報はるか。

伊王野：前回議論して以降、その後は特に議論していない。次回の TMT-J-SAC が来月どこかで開催されるはずなので、そこで議題として挙げる。

諸隈：実施する場合、UM の前と後ろどちらがよいのか等も含め、検討してほしい。

伊王野：その点も含めて議論する。

諸隈：大セミナー室の予約が必要であるため、場合によっては複数候補日で仮押さえすることも考えられるが、遅くとも次回 SAC 会議では日程を確定したい。できればそれより前に決めたい。候補が複数残る場合は、アンケート等で皆さんに伺う可能性がある。まずは、大きなイベント情報を来週中を目途に教えていただき、候補を絞り込みたい。

世話人についても現時点では未定だが、次回 SAC 会議で決めたい。立候補があればお願いしたい。こちらから依頼する場合、引き受けていただけるとありがたい。UM については以上である。他に意見、または見落とししている観点があればお願いする。

松岡：小規模な研究会として、7月13日から15日に AGN 関係で毎年実施している研究会が予定されている。その期間に重なると AGN 分野の参加者は出にくくなる可能性がある。

諸隈：国際研究会か。日本開催か。

松岡：日本で毎年実施している。去年は筑波大学で、今年は愛媛大学である。

諸隈：承知した。他にもあれば、メールでもよいので教えてほしい。

---

## 8. メキシコ (IA-UNAM) との連携について (小山)

### 8-1. Summary

- IA-UNAM 側との MoU は作成して先方へ送付済みであるが、先方法務チェックのコメントは未着である。
  - S26B の Call for Proposals までに決裁を完了するのは困難となったため、先方と相談の上、連携の開始時期は S26B ではなく S27A からとする方針に切り替えた。これにより、S26B の Call へ本件情報を急いで追記する対応は不要となった。
- 

#### 8-2. Decisions

- メキシコ (IA-UNAM) との MoU に基づく連携開始は、S27A からとする。
- 

#### 8-3. Action Items

- 小山：IA-UNAM 側との MoU 調整を継続し、天文台内の企画会議を含む手続きを進め、S27A から余裕を持って開始できるよう準備する。
- 

#### 8-4. Report

小山：先月の SAC では、メキシコ側とは MoU を作成し、先方へ送付した段階であると報告した。その時点ですでに先方は冬季休暇に入っており、判断は休暇明けになると伝えられていた。現時点においても、先方法務部門からのチェックコメントは届いていない。このため、実質的に S26B の Call for Proposals までに本件を決裁することは、ほぼ不可能な状況である。先方とも相談した結果、S26B からの開始を強く希望しているわけでもなく、またクリティカルな事項があるわけでもないことから、S27A からの開始とする方針とした。従って、今回の SAC で何らかの決定を行い、S26B の Call for Proposals に急いで情報を反映させる必要はなくなった。ただし、MoU については着実に手続きを進め、天文台内においても企画会議を通じて決裁を行い、S27A から余裕をもって開始できるよう準備を進めたい。S26B から開始するとしていた点を気にしている委員もいると思うが、先ほどの ToO トリガー関連の議論で「今回は対応しなくてよいのではないか」としたのは、以上の事情によるものである。

---

次回SAC開催日時：

2026 年 2 月 10 日（火）9 時 30 分～

---